聴覚障害者の参与する音声会話における身体資源による修復

ー聞こえの問題に対する話し手の志向性に基づく修復の共同構築ー

水内 樹（筑波技術大学大学院生）　白澤 麻弓（筑波技術大学）

1. はじめに

聴覚障害者の参与する音声会話については，発話の聞き取り／理解に問題が生じた際に，聴覚障害者自身が効果的に聞き返す／確認を取るやり方として，よりよい訂正方略（Repair Strategy，以下「RS」とする.）モデルの構築を巡った議論が，Audiology 等の分野でなされてきた．RS の分類は研究者によって異なり，各方略間の有効性の差も一貫した見解が得られていないが，例えば Caissie (1995) では，大きく「非特定的方略」，「特定的方略」，「確認の方略」の 3 つがあるとされ，問題が生じた箇所を特定しない非特定的方略よりも，特定して示す特定的方略の方が，有効性が高いことが示唆されている．

こうした取り組みの中で，会話分析の視点から，その訂正（修復）の過程を，相互行為現象として捉え直す試みがなされている（Lind et al., 2004 など）．わが国でも秋谷（2011）が，デイケアにおける加齢性難聴の利用者とケアワーカーのやり取りを分析している．しかし，秋谷自身も当該論文を「始論」と位置付けているように，聴覚障害者の参与する音声会話における聞こえの問題が，実際にどのように修復されているのかについては，未だ観察が少ない．

そこで本研究では，聴覚障害者の参与する音声会話における発話の聞き取り／理解の問題に対する修復について，会話分析の視点からさらに観察を行うことで，RS に関する新たな知見を得ることを目的とする．

2. 方法

音声日本語を最も使いやすいコミュニケーション手段とする聴覚障害者と，聴覚障害者との会話経験のない健聴者各 1 名による，初対面時の自由会話を撮影し，15 分ほどの会話を 10 組分収録した．その際，聞こえの問題が生じやすい環境（本来であれば混雑したレストラン等）での会話を収録するため，スピーカーからノイズを提示し，疑似的な雑音環境を設定した．また，話題は自己紹介等から始め，その後は自由に展開してもらうよう説明した．収録した会話からトランスクリプトを作成し，会話分析を行った．尚，実施にあたっては所属機関の研究倫理委員会の承認（承認番号 : 2022-24）を得るとともに，対象者に書面で研究参加の同意を得た．

3. 結果・考察

収録した会話の中から，発話を伴わない身体資源の活用による修復の例がいくつか観察された．第一に，以下の事例 1 のような，音声発話を伴わない首傾げによって，修復が生じている例が見られた．D が聴覚障害者，H が健聴者を示している．

事例 1_19D-20H_01:00-01:07（抜粋）

01	D:	((H))さんは出身どちらで[すか?
02	H:	[私は:,岐阜県,なんですけ[ど:::,
03 →	D:	[((軽く首を捻りながら顎を前に突き出す))
04	H:	岐阜県ってわかります?

D の，出身を尋ねる質問に対し H が「岐阜県」と回答したところ，D が首を傾げ，H が修復を行っている．この事例では，D が、音声発話を伴わない首傾げによって修復の他者開始を行い，H が修復の実行を行っているように見える．

一般に，こうした音声発話を伴わない身体資源によって修復の他者開始のような行為を達成するためには，音声による場合とは異なり，受け手の視線の確保が必要になることが考えられる．そうした視線の確保や，それに基づいた首傾げによる修復開始がどのように達成されているのかを明らかにするため，以下では，Mondada (2018) によるマルチモーダル転写法を取り入れ，身体動作も含めた相互行為の精密な転写を行った．本研究独自の記号については、以下の表の通りである．

表 身体動作の転記に用いる記号

体:	体幹の動き	*	体幹動作の始点／終点	前/後	前傾／後傾	注:D	話者 D への注視
頭:	頭部の動き	$	頭部動作の始点／終点	前 2	前傾状態からの更なる前傾	伏	目を伏せている
視:	視線の動き	^	視線動作の始点／終点	首:前	前方向への首傾げ	下	下方向を見ている

事例 1_19D-20H_01:01-01:13

D と H はともに初対面の大学生．撮影開始後，名前・年齢・学年等を含む自己紹介をお互い簡単に行った後，H が D の出身を尋ねる．D の出身について短くやりとりがあった後，D が H の出身を尋ね返す．

```
01      H: ¥いいですね,近い,ですもんね::,¥
02         (0.2)
03      D: ¥は[い.¥
04      H:     [神奈川は::.
05         (0.3)
06      D: $¥はい.¥(.) *じゃ,*$^(0.5) *^*$¥((H))さんは出*身¥=
   →  体:              *前.......................*後.............................*.....>
       頭: $頷
       視: >>H-------------------------------^H---------------------------->
   →  H:                                                  $頷
   →  体:                        *.................*°前°------------------------->
   →  頭:                        $.................$°首:左°---------------------->
   →  視: >>D-------------------^注:D------------------------------------------>
07      D: =¥ど*ちら¥で[*$^すか?$
   →  体: >.........................*前-----------------------------------------*.............>
   →  頭:                        $.............$首:左--------------------------$.............$
   →  視: >-------------------^注:H-----------------------------------------^注:H--->
08      H:                    [$^私*$は:, *^岐阜県, *なんです$け*$^ど:::,$
   →  体: >-----*.........................*後----*.................*前--------------------------->
   →  頭: >-------------------$,,,,,,,$                                $°頷°
   →  視: >-------------------^D----------^注:D---------------------------------->
09      H: 岐*阜*県*ってわかり[ま$す?
   →  体: >-*.............*前 2------------------------------------------>
       頭:                                $°頷°
       視: >-------------------------------------------------------------^
10      D:                              [$¥あ,*$^岐$阜県!* (.) $[(0.2) はい.¥]
       体: >..........*前 2-----------------------*,,,,,,,,,,,,,,,,,,,*
       頭: 首:前----------------------$,,,,,,,,,$     $頷          $頷 頷 頷
       視: >-----------------------------------^H-------------------------------------------->>
11      H:                                                          [$^¥岐阜県*] $.hhh¥
       体:                                                            >----------*.,,,,,,,,,,,,,,,,>>
       頭:                                                            $頷 頷      $頷 頷
       視:                                                            ^D--------------------->>
12      D: ¥あ:::[え,¥ あの
13      H:        [¥はい, 岐阜県::, なん, すごく::, 田舎の::.hh ところに, 住んでおりまして::,¥
```

D が 06・07 行目で質問を行うとき，まず，D は「出身」と発しながら体を前傾させ，その状態を維持する．また，「ですか?」と発しながら左方向に首を傾げる．D の視線は断片以前から H の方を向いているが，この時，首傾げを維持したまま視線が H に固定されることによって，D の視線は注視していると認識可能な状態になっている．質問を行う際のこうした前傾・首傾げ・注視の維持によって，D は自身の聞こえの問題の発生に対する構えを設けていると言える．

それに対し，H の視線も断片以前から D の方を向いているが，D が「じゃ」と新たな話題を切り出すことを予示すると，姿勢を若干前傾させながら軽く首を傾げ，同時に視線を D に固定させて注視している．その状態を維持したまま「((H))さんは」という指名に頷いた後，「出身ど」までを聞いた時点，すなわち発話の理解可能な点（recognition point; Jefferson, 1973）に至った時点で，前傾させていた体を後傾させ，「私は:,」と応答を始めると同時に首傾げを元に戻す．そして，「ですか?」と発しながら首傾げと注視を行った D に対し，「岐阜県」と応答の核心部分を産出すると同時に，再び体を前傾させ，D の注視を行っている．

この時，前傾・首傾げ・注視を維持していた D と，前傾と注視を行った H によって，D の聞こえの問題の発生に対する構えを設けながら，質問-応答という連鎖を達成することへの，共同注意が構築された状態となったと言える．こうした位置において，D は軽く首を捻りながら顎を前に突き出す形での首傾げを行っている（07 行目）．また、同時に，元々前傾させていた体をさらにもう一段階前傾させることで，D はこのトラブルを聞き取りの問題として扱っていることを示している．

D の首傾げと更なる前傾によって示されたトラブルの発生に対し，H は「岐阜県ってわかります?」というやり方[1]で自己

[1] この時 H は，言語形式上はこのトラブルを理解の問題として扱っているものの，「岐阜」と核心部分を発すると同時に，元々前傾させていた体をさらに前傾させている．ここに，聞き取りの問題に対処することへの志向を見て取ることができる．こうした，言語形式上では理解の問題として修復を実行し，身体動作上では聞き取りの問題への対処を行うというやり方は，事例 2 でも共通して見られるほか，収集した会話の中で特徴的に見られており，参与者に聴覚障害があることへの適応的な修復の仕方が伺えるが，紙幅の都合上，この点については次稿に分析を譲りたい．

修復を行い（09 行目），D は「¥あ，岐阜県!（0.3）はい.¥」と，「状態の変化を示すトークン（A change-of-state token）」の形で「修復の実施の受け取り」（Heritage, 1984）を行い，聞き取りの問題が解決したことを示す．

この事例では，質問-応答という連鎖環境において，参与者双方が前傾・首傾げ・注視等の身体資源を駆使し，聞こえの問題の発生に対する構えを互いに示すことで，連鎖を達成することへの共同注意が構築されていた．そうした環境において，首傾げのみという，最小限のやり方での修復の他者開始が可能になることが観察された．

第二に，聴覚障害者である聞き手の「反応の不在」を契機に，話し手による自己修復が行われていると見える例が観察された．以下の事例 2 がその一例である．

事例 2_19D-20H_04:25-04:31（抜粋）

事例 1 と同じペアによる会話．H は，大学で何を勉強しているかという D の質問に対し，所属学部について説明した後，学芸員に憧れていることに触れ，言語学にも興味があると言及する．

```
01 → H:  でもちょっと言語学, (0.5) の, [(0.7) 言葉の::, 学問?
02 → D:                              [((小さな頷き))
03          (0.2)
04   D:  言葉[:? °うん° ああ! [(あの)
05   H:      [あの:::,        [にもちょっと興味があって::,
```

H は「言語学」と産出すると，その末尾の音調の操作と直後の間合いによって「反応機会場」（西阪，2008）を設けている．しかし，ここでは D の反応はない．H は続けて「の」の後にも反応機会場を設け，そこでの D の小さな頷きの後，「言葉の学問」と言い換える形での修復を行っている．

一見，この「小さな頷き」を契機に自己修復が行われているように見えるが，このとき、H は伏し目がちに瞬きを 2 回行っており，この頷きを視認しているとは言い難い．また，「言語学の」と産出する際の H の身体動作からも，その後の D の「反応の不在」を契機に修復を行っているように伺える．

以下では，このことを身体動作の転写によって示すとともに，この場所において D が特に反応を示さないことが，いかにして「反応の不在」として認識され，いかにして修復すべきトラブルの発生として理解可能になっているかを明らかにする．

事例 2_19D-20H_04:16-04:40

```
01     H:  ちょっと:: (.)$(.)*(.) 憧$れて, $¥い*て$:[*:,¥$ その^:*:] (0.4) ^^め*ん許を*取ろう$かな$::¿ *$
       体:                *..........*前--*,,,,,,,,,,,,*          *..................*
       頭:                      $.....$<頷>---$,,,,,,,,$                        $.....$<頷>$
       視: >>注:D-----------------------------------^注:D----^注:D------------------------>
02 →   D:                                   [*$^¥へえ::*::*::¥]
       体: >>前-------------------------------*,,,,,,,,,,,,* *......................*前------------->
   →   頭:              $°頷 頷°               $頷 頷
       視: >>注:H----------------------------^H---------------^注:H--------------------------->
03     H:  *$っ*て$いう^::[ふ$う*に,                [$¥考^え*て,*いる, ^ところ*::¥$^で$:, *(0.3)*^(0.2)
       体:  *前*°,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,°*------------------------*°,,,°*..............*前------------------>
       頭:  $,,,,,,,,,$            $頷                    $((頭をのけ反る))            $頷
       視: >-----------------------------------------^D------------^D----------^下----------------->
04 →   D:                    [*¥ああ, すごい!*.hhhh*     [$.hh¥
       体: >-----------------*後.....................*,,,,,,,,*                               *.......*°前°-->
   →   頭:                                           $頷 頷 頷 °頷°                     $頷
       視: >-------------^H---------------------------------------------------------------^注:H-->
05 →   H:  で$^もちょっと^言*語$学,$*(0.3)**(0.2)$^の,(.)$(.)^$(0.2)(0.2)**(.)$こ*^とば**の::, が*く$も*ん?
       体: >----------------------*前2...............*°,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,°*-------*..........*°前2°---*..........*-->
   →   頭:   $((頭を上げ揺する)) $......$頷------------$,,,,,,,,,$                                       $頷
   →   視: >--^伏-----------^注:D--------------------------------^伏----------------^注:D------------------------>
   →   D:
       体: >------------------------------*..........*°前2°-----------------------*.......................*°前3°------------>
       頭:                                                  $°頷°---------$
       視: >------------------------------------------^注:H----------------------------------------------->
06     D:  (.)^(.)*$ことば[$:?(.)°う*ん°$(0.3)ああ! [$(あの)
       体: >------*,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,*
       頭:      $頷      $頷        $頷        $頷 頷
       視: >-^注:H------------------------------------------------------------------^注:H----------->>
07     H:                 [$あの^:*::, *^            [にも$ちょっと興味が*あ$^って:[^:,
       体: >°前3°-----------------*,,,,*                          *.....................*前------*,,,,,>>
       頭:                   $頷                        $頷                $<頷>------------$
       視: >---------------------^注:D-^注:D----------------------------------^下--------------^伏------>>
08     D:                                                                  [^う*ん$^う*ん
```

09	H:	その授業:も，取っている¥っていう::[:,¥
10	D:	[¥へ::::す(h)ごい.hhh¥
11	H:	感じですね.hh[.h¥
12	D:	[¥.h .h 私よりすごい夢を持って:::¥
13	H:	¥いや.hhh いや::,¥

Hによる自己修復（05行目）に至るまでのやりとりにおいて着目したいのは，Hによる語りの途中（反応機会場）において，Dが頻繁にあいづちを入れていることである．01行目の，「ちょっと::」の後の頷き，「憧れて,いて:」の後の「¥へえ::::::¥」と頷き，03行目の，「っていう::」の後の「¥ああ，すごい! .hhhh .hh¥」と頷き，「いる，ところ::¥ で」の後の頷きがそれである．こうした，反応機会場における頷き，あるいは頷きと発話の双方によるあいづちによって，Dに聞き取り／理解上のトラブルが無いことが度々表示されてきた．その中で，05行目の「でも」によって話がそれまでとは違う方向性に進むことを予示し，その話題の核心部分である「言語学」を産出した位置において，Dが特に反応を示さないことは，Hがそれを聞き取り／理解上の問題の発生として理解することを十分可能にしている．

この「反応の不在」を契機に修復が行われていることは，05行目のHの身体動作にも見て取れる．Hは，「でもちょっと」では目を伏せながら頭を上げて横に揺すっているが,「言語学」と産出し始めると再びDを注視し，体を更に前傾させている．そして，「学」と産出しながら頷き始めるが，この時，固定されていた視線は頷きの経過とともに上目遣いになり，Dの反応を伺っている様子が見て取れる．頷きの頂点まで至った段階で0.5秒の間その状態を維持し，そこでDが特に反応を示さないことを視認した上で，頷きを戻している．その後，「の,」の後の間合いでDが小さく頷くが，その頷き角度が浅いことや，その間，Hは伏し目がちに2回瞬きをしていてDを注視していないことからも，ここでのDの小さな頷きが修復の契機となっているようには見られない．むしろ，Hの伏し目がちの瞬きの仕方は，Dの反応の不在をトラブルの発生として捉えて修復を開始すべきか否かの判断や，どのような形式で修復を実行するかという言葉探しのために，逡巡しているような表情のように見える．

この事例では，聴覚障害者である聞き手が頷き，あるいは頷きと発話の双方を用いてあいづちを入れることによって，聞き取り／理解上のトラブルが生じていないことが度々表示されてきた中で，「でも」と話題展開が予示され，「言語学」と話題の核心部分が産出された位置の（重要な）反応機会場において，聞き手が反応を示さない（示せない）ことが，話し手による自己開始自己修復の契機として利用可能であることが観察された．

4. まとめ・今後の課題

聴覚障害者の参与する音声会話における修復の様子を観察したところ，身体資源の活用によって，発話の聞き取り／理解上のトラブルが修復されることがあることが分かった．首傾げのみによる修復の他者開始は，「え？」「なに？」等と発話を伴う場合に比べ，自己の発話が他者の発話と重なることによる，新たな聞こえの問題を生じさせるリスクがなく，事例1のような，聞こえの問題に対する共同注意が構築された環境においては，効果的なRSになっているものと考えられた．また，事例2のように，頷きのみによるものも含めたあいづちの度々の使用によって，聞き取り／理解の問題が生じた際に反応を示さないことで，話し手にトラブルの発生が伝わり，修復を導き得ることは，また一つの効果的なRSになり得るものと考えられる．

ただ，こうした身体資源の活用による修復の達成には，話し手と聞き手双方が，聴覚障害者である聞き手の聞こえの問題に対処することに志向し，そうした共同注意状態が互いに認識されていることが必要であるものと考えられる．話し手側のそのような志向が，どのような過程や要因によって導かれたのかについては今回検討できておらず，今後の課題としたい．

5. 参考文献

秋谷直矩 (2011). 難聴の会話分析: 聴能学における訂正方略と会話における修復の組織. 保健医療社会学論集, 22, 2, 45-54.

Caissie R. (1995). Communication breakdown management during cooperative learning activities by mainstreamed students with hearing losses. *The Volta Review*, 97, 105-121.

Gail Jefferson (1973). A Technique for Inviting Laughter and its Subsequent Acceptance Declination. *Everyday language : Studies in ethnomethodology*, Irvington Publishers, 79–96.

John Heritage (1984). A change-of-state token and aspects of its sequential placement. *Structures of Social Action*, Cambridge University Press, 299–345.

Lind C., Hickson L., & Erber N. (2004). Conversation repair and acquired hearing impairment: A preliminary quantitative clinical study. *Australian and New Zealand Journal of Audiology*, 26 , 1, 40-52.

Mondada L. (2018). Multiple Temporalities of Language and Body in Interaction: Challenges for Transcribing Multimodality, *Research on Language and Social Interaction*, 51, 1, 85-106.

西阪仰 (2008). 発言順番内において分散する文: 相互行為の焦点としての反応機会場. 社会言語科学, 10, 2, 83-95.